

淡路島日本遺産の取り組み

伊藤 宏 幸

一、はじめに

淡路島の日本遺産は、『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」―古代国家を支えた海人の営み―をタイトルとするストーリーで、平成二八年度に認定された。

日本遺産とは、地域に点在する様々な文化遺産を地域の歴史的魅力や特色を活かしたストーリーで結び、地域が主体となって総合的に整備・活用することによって、わが国の文化・伝統を国内外に戦略的に発信し、地域の活性化・観光振興に結びつけようとするものである。

地域の魅力とは、他の地域には無いその地域が持つ特色、地域らしさ（＝個性）といえ、それはまさに地域が歩んできた歴史や文化、風土である。したがって、その中で育まれた歴史文化遺産は

地域の魅力（＝個性）を表現する重要な財産になるものと考えられる。

淡路島日本遺産の取り組みは、島の歴史文化を島民が再発見することから始まり、その特徴を共有し、それを島の魅力（＝個性）として発信することで活力ある地域づくりに結びつけようとするものである。

二、淡路島日本遺産のストーリー

認定されたストーリーのタイトルにある「国生みの島」は、島民の誰もが耳にしたことがある「国生み神話」に描かれた島の姿を指している。

この神話が記される『古事記』は、現存するわが国最古の歴史書とされる。その重要な書物の中で、冒頭に登場する神話が「国生み神話」であり、その中で最初に生まれる島として描かれているのが

淡路島である。

イザナギ・イザナミの二柱の神様が高原からおのころ島に降り立ち、日本列島の島々を生んでいく国生みの物語。その内容は史実といえるものではないが、『古事記』の冒頭に登場する重要な神話であることはまぎれもない事実である。さらに、そこには最初に生まれる島として位置づけられる淡路島の姿があり、そのように描かれた背景にある歴史こそが淡路島の歴史文化を考える上で重要となる。

したがって、この神話が誕生した背景を解き明かすことが淡路島の歩んだ歴史を明らかにし、その魅力を向上させることに繋がるものと考えられる。その鍵を握るのが「海人」とよばれた人びとである。周囲を海に囲まれ、畿内の前面に位置する瀬戸内最大の島としての環境が、島の歴史文化を語る上で重要な要素であり、そこには海を生業の場とした人々の役割が重要であつたはずである。淡路島日本遺産ストーリーはこの視点に立ち、「海人」とよばれた人々の活動をおして島の歴史文化をみようとするものである。

三、調査研究の重要性

歴史文化を活かした地域づくりにおいて、調査研究の重要性を忘れてはならない。調査研究により明らかとなった歴史的事実は、他の地域には無いその地域ならではの個性（＝魅力）を生み出すものであり、それを活かした地域づくりこそが、地域が主体となった活用を可能にする。それを持続可能なものとするのも継続した調査研究であり、それによって明らかになる歴史文化は、地域の魅力に厚みを持たせ、地域の個性が輝き続ける力になるものと考えられる。

淡路島日本遺産委員会では、その考え方にに基づき、認定当初から「海人の調査研究事業」に取り組んでいる。考古資料が中心となる構成文化財をとおしてみるストーリーは、考古学を手段とした調査研究が中心となる。しかしながら、「国生み神話」の背景にある歴史に対する理解を深めるには、考古学的なアプローチに加え、『古事記』そのものを研究対象とする文献史学からのアプローチ

チが求められる。

平成二九年から取り組んでいるひょうご歴史研究室と連携した調査研究では、歴史資料としての『古事記』や「国生み神話」に、文献史学からのアプローチを行うことで「海人」の実像に迫ろうとしている。

令和元年度からは、淡路島日本遺産委員会の構成員である筆者が共同研究員としてひょうご歴史研究室の研究にも参画する一方、ひょうご歴史研究室においても淡路島をフィールドとした地域史研究に取り組んでおり、共同研究の成果もさらに深まることとなっている。

このように、両者の絆が強まることで、淡路島の地域史がより豊かなものとなり、ストーリーに対する理解を深めることにもつながっている。

四、魅力の再発見と価値共有

調査研究により明らかになる歴史文化が持つ魅力は、その地域に住む住民にとつての誇りとなり、地域に対する愛着を育むものとなる。外から訪れ

る人々にとつても、そこに暮らす住民が誇りと愛着を持つていない地域には魅力を感じないであろう。地域づくりには欠かせない要素である。そういった意味からも、調査研究の成果を住民と共有し、そこで新たな魅力を再発見してもらうことが重要となる。

淡路島日本遺産委員会では、歴史文化の魅力を外向けに発信する一方で、島民との共有にも力を

淡路島日本遺産公認教科書

淡路島日本遺産の 歩き方

『古事記』の冒頭を飾る
「国生みの島・淡路」
― 古代国家を支えた海人の営み ―



注いできた。ストーリーを理解していただくための教科書として「淡路島日本遺産の歩き方」と題した解説書を作成し、島民から募った日本遺産サポーターの方々に配布するとともに、それを用いた学習会や島内各地でのワークショップを開催してきた。

また、ひょうご歴史研究室と連携した調査研究により明らかにになった成果は、毎年、シンポジウムという形で公開してきた。島内3市の会場を順に開催場所とすることで、大勢の島民の皆さんに参加していただき、新たな島の魅力を再発見する機会となっている。

五、淡路島日本遺産委員会の枠組み

官民が連携した取り組みである点も、淡路島日本遺産の特徴である。ストーリーづくりの段階から組織された淡路島日本遺産委員会を主導したのは淡路青年会議所のメンバーである。そこに淡路島観光協会、淡路島くうみ協会、兵庫県淡路県民局、それに洲本市、南あわじ市、淡路市の観光

部局やまちづくり部局、及び教育委員会が加わった組織である。

認定を目指したストーリーの作成段階では、3市の文化財担当者为中心となり、観光・地域づくり担当者から出される活用を見据えた意見を取り入れた議論が繰り返された。行政の垣根を越え、様々な分野の団体が参画する組織は、淡路島を一つの地域としたストーリー作りや活用事業に効果的な枠組みであったといえよう。なお、現在は、観光振興を担う淡路島観光協会が事務局を努め、事業執行や各団体の調整役を担っている。

様々な分野の団体が構成される組織の中でも、これまでに積み上げられた調査研究に基づく史実を踏まえたストーリー作りや活用事業の実施を目指した。そうした中で、観光担当の構成員から、「この表現は史実に照らして大丈夫ですか」といった声を聞くこともあった。これも史実に基づくストーリーを大切にするといった基本姿勢が共有されていることの表れであり、島の歴史文化の本質的価値と、そこから導き出される個性を大切にしようとするものでもあろう。

六、RPGゲームの製作

淡路島日本遺産委員会では、平成三十一年四月に「はじまりの島」と題するロールプレイングゲームをリリースした。伊弉諾尊に導かれた高校生が、島の歴史を歪めてしまおうとする魔物から淡路島を救うために、海人族の少女らとともに淡路島を冒険する物語である。

ゲームの作成に当たっては、認定されたストーリーが持つ意味を十分に説明し、理解した上で製作に当たってもらうことに努めた。ゲームである



以上、多くの利用者が興味を抱くストーリーが必要であることから、ゲームとしてリリースされたストーリーは史実との隔たりが大きなものとならざるを得なかった。しかしながら、史実に基づくストーリーを理解した上で利用すると、ゲームとしてのおもしろさが増すことに気づかされた。これは、認定されたストーリーが持つ本来の意味を十分に理解した上で製作されたゲームであることの表れでもある。さらには、ゲームの利用者とも歴史文化の本質的価値の共有が重要になることを物語っているものといえよう。

七、事業の効果と今後の展望

日本遺産に期待される効果としては、事業目的として掲げられている地域活性化や観光振興がまぎらわれないが、その一方で、地域の歴史文化に対する理解を深め、地域に対する誇りや愛着を育む人づくりといった効果も期待できる。

淡路島に暮らす住民が、島に対する誇りや愛着を持ち、自信を持って提供されるサービスは、島

を訪れる観光客にとっても魅力あるものとして受け入れられよう。したがって、歴史文化の再発見をとおした地域を愛する人づくりは、観光振興や地域づくりにも欠かせない要素となる。

かつて島民の間では、「日本の歴史は、奈良や京都が中心で、淡路島には重要なものは少ない」といった声も耳にした。しかし、最近では、「淡路島にも重要な文化財が多く、歴史上重要な役割を担った島だった」という声を聞くことが多くなった。これも日本遺産認定の効果ではなからうか。このことが観光振興へも一定の効果をもたらすものと期待している。

令和元年度の兵庫県観光客動態調査報告の速報値でみると、淡路島を訪れた観光客の内、歴史・文化を目的とした観光客数は、日本遺産に認定された平成二八年度に比較して一〇六％と増加しており、平成二六年度との比較でも一〇九％と堅調な伸びを示している。これは他の目的でおとずれる観光客数の推移と比較して高い伸び率を示しており、観光振興における日本遺産認定の効果といえるのではなからうか。

なお、この事業をより実効性あるものとするためには、持続可能な取り組みであるための仕組みづくりが課題となる。認定に至るまでのエネルギーを維持することは難しく、事業を継続するための取り組みに陥らないことが肝要である。

歴史文化を活かしたまちづくりを担う主役は地域住民であり、主体的に取り組む人々が地域づくりの成果を実感できる仕組みづくりが持続可能な取り組みへとつながる。主体的に活動する人づくりとその活動を支援し、持続可能な仕組みづくりへの地道な取り組みが課題となる。

淡路島の歴史文化は、島全体を一つの地域としてとらえることで、より魅力的なものとなる。行政の垣根を越え、島外からの支援も得る中、官民が連携する淡路島日本遺産は、島の歴史文化をより魅力あるものとして発信する上で、必要な枠組みを有しているといえよう。

また、活用の対象が文化財である以上、その本質的価値が魅力あるものとして伝わることが重要である。しかも、それは常に歴史に対して興味を抱いてくれる人だけを対象としたものではなく、

誰もが理解でき、より多くの人々が興味を持てるものとする必要がある。そのためには、調査研究によるストーリーのブラッシュアップを担う文化財担当者、それを活かした活用事業を支援する観光振興・まちづくり担当者が、より緊密な連携を図ることも重要となろう。

調査研究に基づく史実をもとに、島の歴史文化の本質的価値を大切にし、それを島の魅力（個性）として活かしていこうとする淡路島日本遺産委員会の基本姿勢は、それに合致するものである。今後は、それをより多くの人々が理解し、その魅力を共有することができるよう努めることが重要となろう。その成否が将来の文化財の保存と活用にも大きな影響を及ぼすことにもつながる。

ひょうご歴史研究室では、兵庫県と徳島県が共同で進める「鳴門の渦潮」の世界遺産登録を目指す調査研究事業に取り組もうとしている。これは、淡路島をフィールドとする共同研究が世界遺産を目指す取り組みにつながったものともいえ、ひょうご歴史研究室と連携した淡路島日本遺産の研究は、地域史研究とおした島の魅力を再発見する

可能性を広げるものといえよう。

このような取り組みをとおして、島を愛し誇りとする島民が増え、それが魅力ある歴史文化を持った島として発信されることで、多くの人が訪れる島となることを期待するものである。

鉄山（たたら）と日本刀―先祖のルーツを探る―

梶本 武邦

はじめに

平成二九年（二〇一七）六月開催の「たたら吹製鉄とその地域性」（県立歴史博物館）や平成三〇年（二〇一八）十一月開催の「挑戦！たたらで鉄づくり」（県立考古博物館）を含め、私はたたら製鉄関連の講演会等を多数受講して自己研鑽に努めてきた。特に平成三一年（二〇一九）三月開催の「ひょうごの鉄生産と流通」（県立歴史博物館）の講演は興味深い内容であり、非常に印象に残った。講演で紹介された「たたら製鉄遺跡分布図」で梶本家の先祖が関わったと伝わる遺跡名（赤西、鍵懸、音水）が目につき、また、後述する山内職分が姓になった話から梶本姓の語源も再

確認出来たことで、先祖についての思いが一層強くなった。この結果、平成三一年（二〇一九）三月～令和二年（二〇二〇）十一月までルーツを探る取組みを開始する動機となった。なお、私は研究者ではないため、本文中での専門的事項についての検討・考察・評価は避けることとする。

一、梶本家先祖は穴栗鉄山の専属鍛冶大工

（１）先祖のルーツの概要

まず、先祖のルーツを探る上で大きな手掛りとなったのが、父の手記「梶本家経歴ト林兵衛一代記」（昭和五三年／一九七八・父七三歳作）と、兄の手記「随筆集・冬の夜空」（平成四年／一九九二・兄五三歳作）であった。



自宅跡から滝谷鉄山遺跡方面を望む
(波賀町)

父の手記の文頭には、「梶本家先祖はたたら穴栗鉄山専属鍛冶大工で代々鍛冶清左衛門を襲名し」との記載があり、これは位牌と同一の内容の文言でもある。先祖の内三名は穴栗鉄山の三カ所（鍵掛、赤西、音水）で亡くなっており、墓石も各々の地にあつたことから、各地の鉄山を移住しての生活があつたと推測される。なお、一番古い先祖の命日は「文化十一年（一八一四）八月四日」と記されている。穴栗鉄山のうち、音水鉄山は明治維新における炭山の国有化の影響を受けて明治七

年（一八七四）に廃山。これに伴い、梶本家は明治十九年（一八八六）に音水から野尻（現穴栗市波賀町）へと移住する。父は、先祖からの伝来技術である鉄山鍛冶大工職を活かした野鍛冶職を祖父か



自宅に保有する鉄滓（金くそ）

ら引き継ぎ、弟子入り修業を経て開業。戦前（昭和一九年・一九四四）にはその技術を一層発展・発揮することで、より高度な刀造りに方針を変え、日本刀の美の世界を追求しようとした。その後、父は「日本刀鍛錬道場」（島根県）で修業し、後に刀匠「源善正」として生涯二〇数振りの日本刀を鍛錬し出展・奉納・寄進等を実施している。兄の手記には、父から引き継いだ日本刀とその関係遺産についての思い出と心の葛藤が記されている。こうした中、私は両名の手記を熟読してその思い

を汲取り、先祖のルーツを探る取組みに活用し役立てることとした。

なお、私の出生地は野尻（波賀町）であるが、この地域は一七世紀半ば以降から鉄山業が盛んな地である（図1）。兵庫県教

育委員会の分布調査へ平成三年（一九九二）～平成五年（一九九三）によると、製鉄関係遺跡七九か所、鉄穴流し関係遺跡五一か所、合計一三〇か所が確認されている。

（2）父祖伝来品等の保存管理の移管・依頼

先祖のルーツを探る取組みに至った背景には、四元号（明治・大正・昭和・平成）の世を生き抜いた父の没後から三〇余年経過し、合わせて兄弟姉妹が亡き後、その家族が所有する父からの譲渡品（父祖伝来・贈与品類）の「保存管理」を移管・依頼される事態が発生した事による。私の現状での認識・理解度では、子孫への引き継ぎにも不安が予想され、その危機感から対処策としてルーツの探索に至った訳である。

二、宍粟鉄山の昔と今

梶本家の先祖が直接に関わった江戸時代後期の文化一一年（一八一四）以降、明治初期に廃止となる音水鉄山（宍粟市波賀町）を含め、宍粟鉄山



森の上鉄穴流し場遺跡（千種町）



天児屋鉄山遺跡（千種町）

について以下に記す。本来ならば墓石等で先祖の生活の営みが確認されている波賀町内のたたら製鉄遺跡（鍵懸、赤西、音水等）を訪ねるべきであるが、現状での遺跡の整備・保存状況を考慮して同市内の他遺跡七か所へ①出石船着場（山崎）、②安積（一宮）、③小野段林（波賀）、④荒尾・⑤天児屋・⑥森の上鉄穴流し場（千種）・音水（波賀）…②③は遠望するを、令和元年（二〇一九）の五～十一月に現地訪問した。

天児屋のたたら公園遺跡は、石垣郡によって整然と区画されていた。しかしながら、これ以外の遺跡は林道から荒れた小径から山中に入って（時には谷川を渡り！）石垣・屋敷・生活跡等を確認する作業となり、予想以上に肉体を酷使して大変であった。遺跡の大半は林中で枯れ落ち葉で覆われた状態であり、全貌は分かりづらい。しかし、先祖の鉄山生活の実態がこのような自然環境の中にあつたことを思うと、気持ちの高ぶりから疲れもなく気持ちの良い汗をかくことが出来た。

（1）宍粟鉄山の歴史

良質な砂鉄・豊かな山林資源（森林・木炭）と生活用水に恵まれた宍粟の古代製鉄「たたら」の歴史は古い。岩野辺（千種町）には「金屋子の神」（たたら神様）降臨伝説があり、また「播磨風土記」の和同六年（七一三）には、鉄の産地として敷草の村（現宍粟市千種町）と御方の里（現宍粟市一宮町）等の記述がある。また、嘉暦四年（一二三二）に備前長船の刀匠景光と景政が宍粟郡三方西（現宍粟市波賀町小野）で作刀した、と

銘に刻まれた国宝太刀も埼玉県立歴史と民俗の博物館に収蔵されている。

（2）鉄山（たたら）の職分・工程・姓

「砂鉄七里に炭三里」と言われるように、製鉄で使用する木炭の消費量は多く運搬上の困難もある。このため、鉄山従事者は木炭地を求めて山谷を順次移動し、再び旧位置にまたはその周辺付近に回帰した。波賀町内の鉄山遺跡でも一八〇年間で鍵懸・赤西は四回、音水は三回選地されている。こうした中、たたら山内（仕事場と住居を含めた集落）では、四分業の職制組織（図2）によって生活が営まれていた。なお、明治五年（一八七二）の壬申戸籍（平民苗字必ず相唱える事）では、山内での職分名を過去帳の肩書や姓に使用することが多かった点が確認出来る。

①鉄穴流し 砂鉄の採取と水路に砂鉄を含んだ土砂を流し、比重によって砂鉄の分離を担当↓姓は切山、②炭焼き 砂鉄溶解用の大炭、大鍛冶用の小炭を焼く担当↓姓は釜本、③炉場 炉づくり、鉄吹き、鋤出しを担当↓姓は村下・炭坂・番子・

手子、④大工場 歩鋤・銚を脱炭し延鉄にする。

鍛冶大工 大工場の責任者で世襲制↓姓は鍛冶・加治・加地・梶・梶本姓。なお、この事實は父の手記の文頭にある「梶本家先祖はたたら穴栗鉄山専属鍛冶大工で代々鍛冶清左衛門を襲名し…」へ位牌・過去帳（文化一一年・一八一四）に記）とも一致している。

（3）穴栗鉄山の終焉

明治維新時の大改革で製鉄用炭山が国有林に変わり、数百年間続いて来たたたら製鉄の事業経営は困難と成り音水鉄山も明治七（一一年）一八七四（一八七八）頃に廃滅した。このため、各分業の構成集団の鉄山村七二所帯（梶本姓一〇戸）約四〇〇人（現在五所帯九人）の前途は死活問題となり悲惨な事態となった。鉄山廃滅時以降、仕事を求めて各地へ分散し始め、他鉱山（生野・明延）、炭焼き、野鍛冶…と転職・転出・移住した。稼業繁栄した鉄山跡は現在祭祀者も無く、多数の墓碑群が遺跡となり哀れな状況である。こうした中、梶本家は明治一九年（一八六八）に野尻に移住し、

野鍛冶を営業する。

（4）移住後の家業のその後

明治一九年（一八八六）、曾祖父（四一歳）は家族（七人）と共に野尻に移住、先祖伝来の鍛冶大工の経験・技術を活かして野鍛冶（農具・包丁・林業道具等製作）を開業し生計を立てた。明治二四年（一八九二）九月に曾祖父の病死（享年四六歳）、祖父に引き継がれた家業は順調で母屋を新築（二階付き）し、周辺の杉山・田畑も購入している。大正一一年（一九二二）四月、祖父の病死（享年五五歳）に伴い、父（一七歳）は親戚の勧めもあって伝来家業の野鍛冶業を継ぐ。大正一三年（一九二四）一二月から穴栗一の秋田鍛冶で弟子修業し、途中約二年間の兵役も経て昭和四年（一九三二）八月に修業を終え、翌月から家業を再開（二六歳・弟子一人付）する。昭和一三年（一九三八）六月、昭和一六年（一九四一）二月は再度の兵役、復員後も太平洋戦争は継続中であり、徴用が再招集かと不安な毎日を過ごしたようである。

三、伝統家業を活かした刀鍛冶への挑戦とその後

(1) 刀鍛冶修業と日本刀鍛造

父(三八歳)は昭和一九年(一九四四)二月に刀鍛冶への道を選択・決断し、日本刀鍛錬道場(島根県)の刀匠・初代川島忠善氏の下で修業、昭和二〇年(一九四四)一月からは、自宅で刀匠・源善正として鍛造するへ日米講話記念刀(昭和二七年/一九五二)八月作含む)。なお、昭和二〇年(一九四五)九月、昭和二七年(一九五二)四月の間、日本は連合国軍の占領下であり、日本刀



刀匠源善正(父・中央)が講和記念刀鍛造中の神戸新聞掲載記事(S27(1952).8.8付)

の製作は禁止させられた状態であった。以下については父亡き現状では確認出来ない疑問事項であり、これらは推測するのみである。

その一 父は何故、家族五人を残してまで勇気のいる刀鍛冶への道を選択・決断したのか？

①経済的余裕有、②野鍛冶と刀鍛冶との知識・技術・工程の共通性、③日本刀の魔力・魅力、④宋栗鉄と「播磨風土記」の歴史的記事の理解

その二 刀匠名の源善正は何に由来するのか？

①源↓源頼朝・武家政権(武士・刀)・日本刀の黄金期、②善正↓実子長男へ昭和一五年(一九四〇)二月病死(享年六歳)の名でありそれを偲ぶ。

(2) 鍛造日本刀の出席・奉納・寄進と現状確認
刀匠・源善正(父)は、その生涯に二〇数振りの日本刀を鍛造して姫路城天守閣内での「郷土刀展」への出展や神社(六ヶ所に二〇振り)に奉納・寄進し、御神刀として奉られている。私自身も贈与・移管された日本刀一〇振りを保存管理しているが、不思議なことに手入れを重ねるにつれてそ



梶本家伝来刀（上2口）と
刀匠源善正（父）鍛造刀（下1口）

の魅力・魔力に
引き付けられ、
現地での訪問活
動を行うことと
した。

令和元年（二
〇一九）三月、
九月に、奉納・
寄進先の寺社
（播磨国総社、
御形神社、波賀・

野尻八幡神社、原不動御堂、仏祥山満願寺）を訪ねて保存状況と現品の確認、および手入れを実施した。奉納時期は三五～六八年前であり、当時の感謝状署名者は生存せず世代交代した状況であった。しかしながら、先方の関係者（宮司・住職・自治会役員等）の前向きな御協力もあり、ほぼ健全な状態で刀剣類とわが子に会おうような感動的な再会の機会を得ることが出来た。

おわりに

この度の取組みで得た貴重な情報は、写真等を多用した形でデータベース化済み（例「奉納・寄進刀剣類の仕様一覧」他）であり、父・兄の「手記」と共に子孫に引継ぐ所存である。また、今後は先祖のルーツの一層の詳細解明に努めたい。あわせて、未実施である父の刀鍛冶修業地（島根県）の訪問については早期に息子二人と共に実行する予定であり、その日が来ることを私は心から楽しみにしている。

参考文献

- （1）兵庫県西播磨県民局『たたらふるさと西播磨』
- （2）鳥羽弘毅『たたらと村・千草鉄とその周辺』一九七七年。
- （3）波賀町『波賀町史』一九八六年。
- （4）田路正幸『播磨国宍粟郡における製鉄遺跡』（『ひょうご歴史研究室紀要』第三号 二〇一八年）。

図1 中央市の鉄山遺跡図（出典：波賀町史）

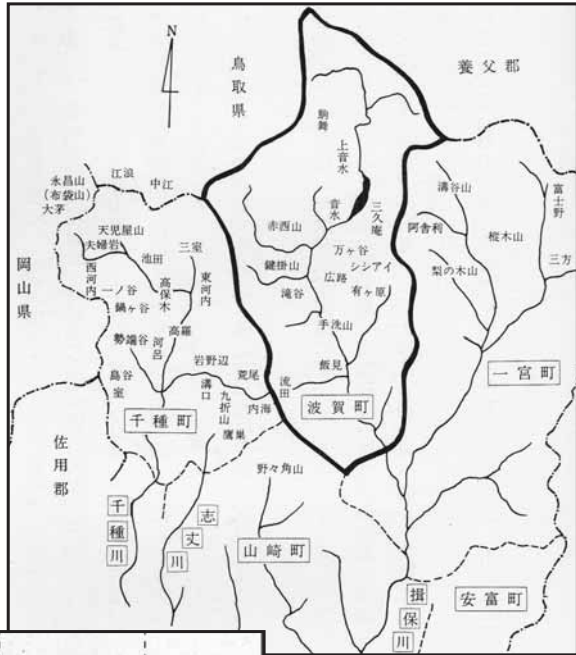
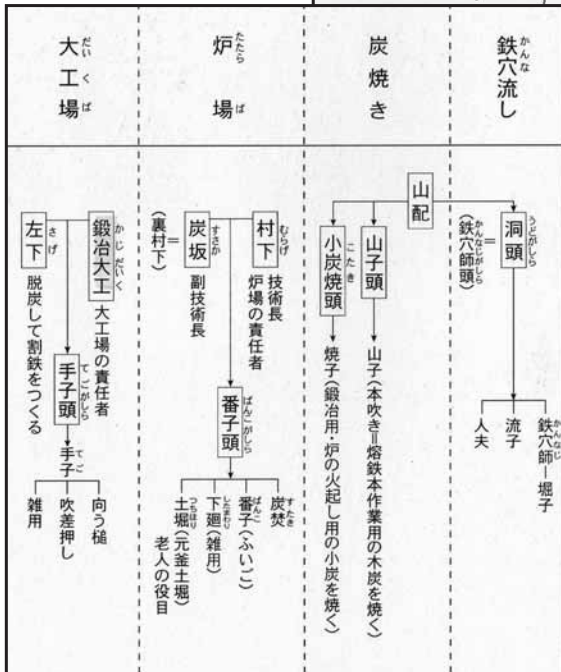


図2 職制組織（出典：たたらふるさと西播磨）



活動記録

ひょうご歴史研究室（以下、研究室と略す）は、平成二十七年（二〇一五）四月、県民の郷土に対する愛着を深め、「ふるさと意識」に根ざしたひょうご文化の発展・継承をめざし、また県内各地の歴史の調査・研究を目的にして、兵庫県立歴史博物館内に開設された（設置要綱は147頁に掲載）。

研究室の構成メンバーは、博物館長が室長を、次長が副室長を兼務し、そのほか館内外の博物館・資料館の学芸員や職員、市町の文化財担当者、大学研究者、民間団体研究者などに、参与・研究員などとして協力を仰いで成り立っている。

本年度からコア会議メンバーに、昨年度まで文化財課長だった山下史朗兵庫県企画県民部地域創生局参事（歴史資源活用担当）が顧問として加わった。

また本年度から今後の世代交代をすすめるために新たに協力研究員という枠を設け、垣内章・大平茂・村上泰樹の三氏がその任に就いた。

これらの全体を統括するのは、教育委員会事務局文化財課の甲斐昭光課長で、そのもとに本年度は、三名の文化財課職員が、各班の補佐役を担当した（大本朋弥主任、柏原正民副課長兼文化財班長、小川弦太主査）。また昨年度まで補佐役だった永恵裕和主任は、兵庫県立考古博物館の主任として転出し、その立場で赤松氏と山城研究班の研究員として加わった。

また非常勤職員の研究コーディネーター（坂江渉）・歴史研究推進員（大村拓生）・事務スタッフ（長澤喜史県政推進事務員）の各一名を配置し、研究室は現在、総勢三六名で構成されている（148頁の「室構成メンバー一覧」を参照）。

開設初年度、研究の基本方針を討

議するコア会議、全体会議の開催を経て、室の当面の研究テーマを、

①『播磨国風土記』、

②赤松氏と山城、

③たたら製鉄、

の三つにすることが決められた。それを遂行するため、三つの研究班を編成した。

平成二十七年度は、編纂一三〇〇年記念を迎えた『播磨国風土記』研究、二八年度は、赤松氏と山城研究、二九年度は、たたら製鉄研究に集中的に取り組んだ。開設四年目以降は、とくに重点的な研究テーマを立てていない。

ただし平成三〇年度から、研究室の全体方針を掲げ、本年度は、「五年間の研究成果を踏まえ、基礎研究を継続するとともに、島根県古代文化センターとの連携を強化して、ひょうご地域史研究の発展を図る」と決めた。

この方針のもと事業をすすめる予

定であったが、残念ながら新型コロナウイルス禍により、本年度は順調に活動をすすめることができなかった。

第一に、コロナ禍「第一波」段階の年度当初は、各班のフィールド調査活動を抑えざるを得なかった。これによりとくに『播磨国風土記』研究班の調査件数は、昨年度と比較して半減近くになった。

第二に、外部の協力組織である淡路島日本遺産委員会と島根県古代文化センターとの合同事業はほとんどできず、つぎの市民向け企画を中止した。

□令和三年二月七日開催予定

・ひょうご歴史研究室in淡路島IV

(淡路市)

□令和二年十一月二八日開催予定

・ひょうご歴史文化フォーラム

(三木市)

それぞれ関係団体と協議して、かなりの具体案を立てていたが中止、延期とせざるを得なかった。

□国際シンポジウムの開催予定

また令和二年の九月頃、海外の『播磨国風土記』研究の第一人者、エドウィーナ・パーマー氏を招いて開く予定だった国際シンポジウム企画も延期と決めた。

第三に、年度当初に開催予定の第一回コアメンバー会議も対面開催を止めて書面審査とした。それを通じて、コロナ禍のもとでの本年度の具体的方針として、

①コロナ流行がある程度収まった段階で、基礎的な調査研究活動と三つの班の研究会を再開させること、

②その成果を広く発信するため、ホームページの内容を充実し、原則として月二回のペースで「研究員のリレートーク」を継続していくこと、

③新たに「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトを立ち上げ、兵庫県と徳島県が共同ですすめている「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進事業に協力し、二ヶ年の予定で、研究室を母体

とした学術調査に着手すること、

④本年度刊行予定の『ひょうご歴史研究室紀要』第六号の内容は、「播磨の道」という特集を立て、各研究員が執筆のため早めの準備をしていくこと、などの点が決められた。

これらについては、その後ほぼ方針通りに実施することができた。また第二回コアメンバー会議については、感染症対策を講じながら、令和二年一月一九日、館内ホールで開催した。

以下、三つの班の研究活動と研究成果を簡単に紹介する。

なお各班の研究会と調査活動、および「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの活動内容については、145頁～146頁の一覧表を参照のこと（本誌第五号に掲載できなかった昨年度の分も含む）。

一、『播磨国風土記』研究班

(1) 体制と研究方針

本年度は昨年度と同様、合わせて一〇名のメンバーで構成された。

第一回研究会で、研究方針を昨年度と同様、「『播磨国風土記』調査研究を持続させるとともに、関係する自治体関係者との信頼関係を確立した上で、広く県内各地の古代史研究にも着手する」とすることが確認された。

ただしコロナ禍のもと、調査活動そのものは、『播磨国風土記』研究、古代の大阪湾岸の海人の実態調査、および特集号「播磨の道」というテーマの『研究室紀要』六号の刊行に向けた準備をすすめる、という三本柱を中心することが決められた。

このうち『播磨国風土記』研究に関して、令和三年度の秋、神戸新聞総合出版センターから『播磨国風土記の古代史』という本を刊行するこ

とが決まった。令和三年四月から、研究班メンバーを中心に、刊行に向けた論文合同研究会をリモート形式で毎月開き、現段階で所収予定の四〇本の論文のうち、半分近くの原稿が集まっている。

本年度の研究成果は、以下のとおりである。

(2) 研究成果の公表

① ひょうご歴史研究室 in 淡路島＋淡路島日本遺産海人の調査研究事業

Ⅲ（昨年度分）

□ 令和二年二月一日（土）

□ 洲本市文化体育館大ホール

③ 「古墳時代の淡路島と大阪湾岸

— 海人の生業・習俗・地域間交流 —
シンポジウム」

□ 淡路島日本遺産委員会との共催行

事

□ 参加者は一九〇名

② ふるさとの歴史講座神戸校の歴史講座への協力

前副室長の豊田幸雄氏の紹介で、本年度から公益財団法人・兵庫県芸術文化協会の「令和二年度兵庫県生活文化大学」の歴史講座の開催に、研究室が共催団体として協力することになった。

テーマを「神戸・阪神間の古代史」として、合わせて一〇回の講演会を開く予定であったが、コロナ禍のため計七回の内容に変更された（144頁参照）。毎回の参加者は平均して四〇人程度である。

③ 本誌での論文執筆

中村弘研究員と坂江涉研究コーディネーターが特集論文を、伊藤宏幸共同研究員が「歴史遺産活用」コーナーに執筆した。

二、赤松氏と山城研究班

(1) 体制と研究方針

昨年度までリーダーの小林基伸客員研究員、本館を定年退職した堀田浩之研究員が退任し、新たにたつの市教育委員会歴史文化財課長の義則敏彦氏が共同研究員、新任の本館技術職員（学芸員）の竹内信氏が加わり、総勢十一名の構成になった。新リーダーには山上雅弘氏が就いた。

昨年度の研究方針に代え、「たつの市と連携して、城山城の構造について古代・中世の両側面から調査研究するとともに、前期赤松氏の動向について幅広く資料収集・分析をはかる」という方針を立てた。

このもとで、城山城の現地調査や表採遺物の整理、赤松氏関連の文献史料調査、赤松居館跡の発掘調査の取りまとめへの協力をおこなった。その成果を、以下の形で公表した。

(2) 研究成果の公表

① たつの市立理蔵文化財センター特別展「城山城く古代山城と赤松の城」への協力

義則共同研究員が企画・立案した令和三年一月三〇日～三月八日開催の展覧会に協力し、山上共同研究員が図録執筆・講演会をおこなった。

② 『神戸新聞』への取材協力

西播磨の山城に関する連載企画、「とりでの記憶」について、大村拓生歴史研究推進研究員が記者取材に応じ、その談話が令和三年一月四日付け同紙に掲載された。

③ 本誌での論文執筆

大村拓生歴史研究推進員と藤木透共同研究員が、本誌の特集論文に執筆した。

三、たたら製鉄研究班

(1) 体制と研究方針

昨年度と同じ一〇名のメンバー構

成で、調査研究に取り組んだ。

第一回研究会で研究方針を、昨年度と同様、「宍粟市と共同して、考古部門と文献調査部門の基礎的研究をすすめる」とする点が確認された。

この方針のもと、文献史学と考古学の両面から調査に着手した。コロナ禍のもとであったが、文献史料については、天児屋たたら製鉄の墓碑資料調査、考古学の分野では、安積山遺跡とカンカケ遺跡等の資料・フィールド調査をすすめた。また平成三〇年度から本格的に始まった島根県古代文化センターとの連携交流は、本年度はほとんどできなかった。

代わって岡山県教育庁との連携が始まり、第二回研究会で同教育庁文化財課文化財保護班の上樗武主幹による報告を得て、活発な議論をすることができた。

公表した研究成果は、つぎの通りである。

(2) 研究成果の公表

①『紀要』別冊の刊行記念シンポジウムの開催

一昨年度から取り組み始めた本館所蔵の二つの史料群、『宝暦六年鉄山一件』と『播磨宍粟郡鉄山請負御用留』の翻刻作業が完了した。それらの成果を、本誌第三号に掲載した『千草屋手控帳』の翻刻史料と合わせて、令和二年三月に刊行した。

当初、本年度七月に刊行記念シンポジウムを開催する予定であったが延期して、九月一九日に館内で開催した。感染対策を講じたため、参加者は五四名であった。

②本誌での論文執筆

田路正幸共同研究員が、本誌の特集論文に執筆した。またそれに関連して本館友の会の理事、梶本武邦氏に論考執筆を依頼して、「フィールドレポート」コーナーに掲載された。

四、その他

①「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

研究室では新たに本年度から二年を目途にして、「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトに取り組みだした。その経緯・主旨・構成メンバー等については、「歴史遺産活用」コーナーの藪田貫館長論文に詳しいが、コロナ禍のもと、ある程度のスピードで調査研究がすすんでいる。

②研究室ホームページ

研究室では、平成二七年の秋、情報発信ツールの一つとして、ホームページを開設した。

催し物の案内のほか、三つの研究班の調査活動や研究成果を取り上げている。

コロナ禍の本年度は、新たに「研究員のリレートーク」をアップし、県民向けの情報発信につとめている。

ことは前述の通りである。令和三年一月二〇日段階で、合わせて一六名が登場し、興味深い話が載せられている。詳細はホームページをご覧ください。

(以上、文責は坂江渉)

ふるさとの歴史講座 神戸校 「神戸・阪神間の古代史」

【会 場】生田文化会館大ホール 神戸市中央区中山手通6丁目1-40（10月・11月・12月）
兵庫県民会館3階 303号室（1月・2月・3月22日）
兵庫県民会館10階 福の間（3月1日）

【時 間】午後2時から3時30分まで（月曜日）

【年間受講料】一般：12,600円 ※友の会会員：9,100円

※県立美術館「芸術の館 友の会」、県立歴史博物館友の会会員も対象

【日程等】

新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から、講座日程および講座内容等を下記のとおり変更して実施させていただきます。

	実 施 日	講 座 内 容	講 師
①	10月5日(月) 生田文化会館 大ホール	律令時代の西摂・東播と人々のくらし	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉
②	11月9日(月) 生田文化会館 大ホール	猪名川流域の古代王宮	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃
③	12月7日(月) 生田文化会館 大ホール	「神功皇后」の伝承地 -生田社と長田社-	ひょうご歴史研究室客員研究員 (立命館大学非常勤講師) 高橋 明裕
④	1月18日(月) 3階 303号室	古墳時代の瀬戸内交通 -兵庫県内の港・津-	ひょうご歴史研究室協力研究員 大平 茂
⑤	2月1日(月) 3階 303号室	天皇と有馬温泉	ひょうご歴史研究室客員研究員 (神戸大学大学院教授) 古市 晃
⑥	3月1日(月) 10階 福の間	武庫の山と六甲山	ひょうご歴史研究室 研究コーディネーター 坂江 渉
⑦	3月22日(月) 3階 303号室	江戸の「古代史」 -ルーツに憧れた近世人-	兵庫県立歴史博物館長 兼 ひょうご歴史研究室長 藪田 貴

※ 都合により日程、会場、講師、内容が変更する場合があります。ご了承ください。

【問い合わせ】公益財団法人 兵庫県芸術文化協会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通4-16-3

TEL (078) 321-2002

FAX (078) 321-2139

e-mail: sinkoubu@hyogo-arts.or.jp

令和元年度（承前）～令和２年度 「ひょうご歴史研究室」研究会一覧（敬称略）

コア会議

	日付	場所	内容	人数	備考
①	12／19(土)	館内	若い人材の育成、令和３年度の体制等について	12	

『播磨国風土記』研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
	2／1(土)	洲本市	・和田晴吾（兵庫県立考古博物館長） 「漁具からみた大阪湾岸と淡路島の海人」 ・坂江 渉「記紀の「槁根津日子」伝承と大阪湾岸のウミガメ」	190	淡路島日本遺産委員会との合同研究会
①	6／7(日)	館内	・積山 洋「古代大阪湾の漁業と塩業」	17	
②	10／24(土)	館内	・古市 晃「オケ・ヲケ伝承の基礎的考察」 ・中村 弘「古墳時代の播磨の道」 ・坂江 渉「播磨の古道と白鳳寺院」	13	

赤松氏と山城研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7／26(日)	館内	・大村拓生「前期赤松氏研究の課題－赤松氏庶流の動向をめぐって」 ・山上雅弘「城山城調査について」	16	
②	10／3(土)	館内	・義則敏彦「城山城の遺構・遺物・周辺の遺跡等」 ・山上雅弘「城山城と南北朝～室町期城郭調査」 ・大村拓生「地誌に見える城山城周辺の寺社・城郭の由緒について」	14	

たたら製鉄研究班

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	7／12(日)	館内	・『紀要』別冊「近世播磨のたたら製鉄史料集」の評価	16	
②	9／19(土)	館内	・土佐雅彦「中国山地のたたら製鉄の技術的変遷」 ・笠井今日子「『鉄山請負御用留』の語るたたら製鉄」 ・大槻 守「『鉄山一件』の語るたたら製鉄」	59	『紀要』別冊刊行記念シンポジウム
③	12／19(土)	館内	・上楯 武「古代・中世美作の鉄生産」 ・土佐雅彦「『山方役所勤方覚書』 2史料の翻刻について	13	大槻守、村上泰樹両氏の報告は、時間の関係で延期になった

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト

	日付	場所	報告等	人数	備考
①	8／29(土)	洲本市文化体育館	第1回「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究会	15	
②	12／2(水)	淡路県民局・洲本市・南あわじ市・淡路市	主旨説明及び協力依頼のため各市教育長等を訪問した。	3	
③	12／5(土)	南あわじ市立図書館・福良地区公民館	南あわじ市の津波に関する聞き取り調査	2	
④	12／21(月)～22(日)	沼島	漁法、魚食、漁民の移動に関する聞き取り調査	1	

令和元年度（承前）～令和２年度 「ひょうご歴史研究室」現地調査等一覧

『播磨国風土記』研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	1／29(木)	現地調査	洲本市文化体育館、先山千光寺他	3	
	3／8(日)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	出土遺物の熟覧調査
	3／9(月)	現地調査	辻ヶ内遺跡（上郡町）	1	高田駅家推定地
	3／21(土)	資料調査	三木市史編纂室	1	研究打合せ
①	7／28(火)	資料調査	小野市立好古館、広渡廃寺跡歴史公園	1	
②	8／9(日)	資料調査	大阪府立中央図書館、柏原市立歴史資料館	1	
③	8／30(日)	現地調査	洲本市立淡路文化史料館、由良城城郭石材集積地他	4	出土遺物の熟覧
④	9／24(木)	現地調査	登り田遺跡（姫路市）	2	
⑤	10／16(金)	現地調査	西脇市郷土資料館、野村廃寺跡（西脇市）他	1	
⑥	11／2(月)	現地調査	下畑海神社（垂水区）、久昌寺（須磨区）他	1	
⑦	11／6(金)	資料調査	明石市立文化博物館	1	
⑧	11／18(木)	資料調査	兵庫県立考古博物館	1	研究打合せ
⑨	12／8(火)	現地調査	大野白髭神社（洲本市）、神本寺（南あわじ市）他	2	
⑩	1／12(火)	資料調査	大阪府立中之島図書館	1	

赤松氏と山城研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	2／10(月)	資料調査	上郡町郷土資料館	5	出土土器の精査
①	8／6(木)	現地調査	大通寺（市川町）、法楽寺（神河町）他	1	
②	9／10(木)	現地調査	たつの市立歴史文化資料館、富島神社他	1	
③	9／24(木)	現地調査	小野市立好古館、慶徳寺、堀井城跡他	1	
④	11／5(木)	資料調査	兵庫県立考古博物館、明石市立文化博物館	1	
⑤	11／27(金)	現地調査	たつの市立歴史文化資料館、井関三神社他	1	
⑥	12／25(金)	現地調査	城山城と周辺遺跡	2	

たたら製鉄研究班

	日付	用務	行き先	人数	備考
	3／18(木)	資料調査	生野書院（朝来市）、朝来市埋蔵文化財センター	3	
①	10／7(木)	資料調査	宍粟市歴史資料館	6	
②	11／24(火)	現地調査	カンカケ遺跡、小野タタラバ遺跡（宍粟市）	3	

「ひょうご歴史研究室」設置要綱

(設 置)

第1条 兵庫県内の地域の歴史の調査・研究を通じ、県民の郷土の歴史に関する理解をさらに深め、教育、学術及び「ふるさと意識」に根ざしたひょうごの文化の継承・発展に資するため「ひょうご歴史研究室」(以下「研究室」という。)を置く。

(場 所)

第2条 研究室の設置場所は兵庫県立歴史博物館内とする。

(所掌事務)

第3条 研究室は次に掲げる兵庫県の歴史研究に関する業務を行う。

- (1)兵庫県の歴史に関する調査・研究に関すること。
- (2)調査・研究成果の普及に関すること。
- (3)調査・研究成果の活用に関すること。
- (4)その他兵庫県の歴史研究に関すること。

(組 織)

第4条 兵庫県立歴史博物館長の下に研究室の室長、副室長及びその他所要の職員を置く。

2 室長は兵庫県立歴史博物館長を、副室長は兵庫県立歴史博物館の次長をもって充てる。

(庶 務)

第5条 研究室の運営に係る庶務は兵庫県立歴史博物館において処理する。

(補 則)

第6条 この要綱に定めるもののほか、研究室の運営に関して必要な事項は別に定める。

附 則

この要綱は、平成27年4月1日から施行する。

令和2年度 ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧

(敬称略)

【ひょうご歴史研究室コア会議メンバー】(12名)

室 長	藪 田 貫	兵庫県立歴史博物館 館長
副 室 長	筆 保 慶	兵庫県立歴史博物館 次長
参 与	中 元 孝 迪	播磨学研究所名誉所長、兵庫県立大学特任教授
顧 問	山 下 史 朗	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)
研究コーディネーター	坂 江 渉	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
歴史研究推進員	大 村 拓 生	兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室
共同研究員	大 谷 輝 彦	姫路市教育委員会文化財課 課長 [2年目から]
共同研究員	山 上 雅 弘	兵庫県まちづくり技術センター 技術専門員
協力研究員	村 上 泰 樹	元兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 次長
研 究 員	中 村 弘 弘	兵庫県立考古博物館 学芸課長 [4年目から]
県教委事務局	甲 斐 昭 光	兵庫県教育委員会事務局文化財課 課長
☆ 県教委事務局	柏 原 正 民	兵庫県教育委員会事務局文化財課 副課長兼文化財班長

【『播磨国風土記』研究班】(10名)

◎ 研究コーディネーター	坂 江 渉	再掲
客員研究員	古 市 晃	神戸大学大学院人文学研究科 教授
客員研究員	高 橋 明 裕	立命館大学文学部 非常勤講師
共同研究員	大 谷 輝 彦	再掲
共同研究員	伊 藤 宏 幸	淡路市教育委員会文化財活用等担当部長 [5年目から]
研 究 員	神 戸 佳 文	兵庫県立歴史博物館 社会教育推進専門員
研 究 員	中 村 弘 弘	再掲
協力研究員	垣 内 章	播磨学研究所 研究員 [2年目から]
協力研究員	大 平 茂	元三木市立金物資料館館長
☆ 県教委事務局	大 本 朋 弥	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主任

【赤松氏と山城研究班】(11名)

◎ 共同研究員	山 上 雅 弘	再掲
共同研究員	田 村 正 孝	大手前大学史学研究所 研究員 [3年目から]
共同研究員	中 井 淳	兵庫県立大学地域資源マネジメント研究科 教授 [4年目から]
共同研究員	藤 木 透	佐用町教育委員会教育課企画総務室 副室長
共同研究員	大 谷 輝 彦	再掲
共同研究員	島 田 拓 彦	上郡町教育委員会教育総務課総務・文化財係 学芸員 [2年目から]
☆ 共同研究員	義 則 敏 彦	たつの市教育委員会歴史文化財課 課長
研 究 員	永 惠 裕 和	兵庫県立考古博物館 主任
☆ 研 究 員	竹 内 信	兵庫県立歴史博物館技術職員(学芸員)
歴史研究推進員	大 村 拓 生	再掲
☆ 県教委事務局	柏 原 正 民	再掲

【たたら製鉄研究班】(10名)

◎ 協力研究員	村 上 泰 樹	再掲
客員研究員	大 槻 守	香寺町史研究室主宰
客員研究員	岩 城 卓 二	京都大学人文科学研究所 教授 [4年目から]
客員研究員	土 佐 雅 彦	前兵庫県立篠山東雲高等学校教諭 [3年目から]
共同研究員	藤 田 淳	兵庫陶芸美術館 所長補佐兼学芸課長 [2年目から]
共同研究員	伏 谷 聡	兵庫県企画県民部管理局文書課文書管理班 会計年度任用職員
共同研究員	田 路 正 幸	宍粟市教育委員会社会教育文化財課 専門員
共同研究員	笠 井 今 日 子	西宮市立郷土資料館 学芸員 [2年目から]
研 究 員	吉 原 大 志	兵庫県立歴史博物館 主任(学芸員) [4年目から]
県教委事務局	小 川 弦 太	兵庫県教育委員会事務局文化財課 主査 [3年目から]

県政推進員 長 澤 喜 史

兵庫県立歴史博物館 ひょうご歴史研究室

※ ☆新メンバー、◎リーダー

【「淡路島と鳴門の渦潮」調査研究チーム】（9名）

座長	藪田貫	ひょうご歴史研究室長
委員	坂江渉	ひょうご歴史研究室研究コーディネーター
	古市晃	ひょうご歴史研究室客員研究員
	大村拓生	ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
	山上雅弘	ひょうご歴史研究室共同研究員
	木村修二	神戸大学大学院人文科学研究科特命講師
	福家清司	徳島県埋蔵文化財センター理事長
	磯本宏紀	徳島県立博物館学芸員
オブザーバー	山下史朗	兵庫県企画県民部地域創生局参事(歴史資源活用担当)
「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会		
臨時職員	福永明子	

執筆者紹介

- ・ 藪田 貫（やぶた・ゆたか）
ひょうご歴史研究室長
- ・ 禰宜田 佳男（ねぎた・よしお）
大阪府立弥生文化博物館長
- ・ 中村 弘（なかむら・ひろし）
兵庫県立考古博物館学芸課長
- ・ 坂江 渉（さかえ・わたる）
ひょうご歴史研究室研究コーディネーター
- ・ 大村 拓生（おおむら・たくお）
ひょうご歴史研究室歴史研究推進員
- ・ 大國 正美（おおくに・まさみ）
神戸新聞社取締役企画総務局長
- ・ 池田 征弘（いけだ・まさひろ）
神戸深江生活文化史料館長
- ・ 田路 正幸（とうじ・まさゆき）
兵庫県立考古博物館事業部学芸課主査
- ・ 藤本 透（ふじき・とおる）
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 伊藤 宏幸（いとう・ひろゆき）
ひょうご歴史研究室共同研究員
- ・ 梶本 武邦（かじもと・たけくに）
兵庫県立歴史博物館友の会理事

編集後記

ひょうご歴史研究室も、コロナ禍により六月まで研究会を実施できず、秋以降も例年開催してきた市民向けの成果発表会は一度のみでした。それでも七月からは研究会・現地調査を再開し、HP上で研究員のリレートークも始めました。

本紀要も研究室メンバーと交流のあった外部の方々のご協力も得て、特集「播磨の道」として論文五篇・研究ノート三篇を掲載することができました。また歴史遺産活用として、今年度からの新規事業である「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト・『播磨国風土記』研究班が協力してきた淡路島日本遺産事業について紹介し、フィールドレポートは、たたら製鉄研究班の活動が一つのきっかけになったものです。

まだまだ予断を許さない状況ですが、工夫を重ねてさまざまな活動に取り組んでゆきたいと考えていますので、引き続きのご支援を心よりお願いする次第です。
(大村拓生)

ひょうご歴史研究室紀要 第六号

令和三年（二〇二一）三月二十六日発行

編集・発行 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室

（編集担当・坂江渉、大村拓生、長澤喜史）

〒六七〇〇〇二二 兵庫県姫路市本町六八番地

電話 〇七九二二八八九〇一一

HP <https://rekihaku.pref.hyo.go.jp/>

印刷 刷 合名会社 柳生印刷所

〒六七一一五六一 兵庫県揖保郡太子町鰯五六八

電話 〇七九二二七六〇〇四八

BULLETIN OF THE HISTORICAL INSTITUTE OF HYOGO PREFECTURE

HYOGO REKISHI KENKYUSHITSU KIYO

No.6

Mar. 2021

Foreword

..... YABUTA Yutaka (1)

Special Issue : "Roads in *Harima* Province"

Articles:

Road in *Harima* Province in *Yayoi* Times

..... NEGITA Yoshio (3)

Wa Dynasty and Roads in *Harima* Province in *Kofun* Times

..... NAKAMURA Hiroshi (20)

Road and Temple in *Harima* Province in Ancient Times

..... SAKAE Wataru (32)

Traffic and Political Base in Western *Harima* Province in *Muromachi* Times

..... OOMURA Takuo (52)

High Way and Milestone in *Harima* Province in *Edo* Times

..... OOKUNI Masami (73)

Research Notes:

Station Site of *Takada* and Regional Society in Ancient Times

..... IKEDA Masahiro (94)

Tatara-Iron Transporting Road in *Edo* Times

..... TOUJI Masayuki (101)

Road to *Inaba* County and Milestone on Border in Early *Meiji* Times

..... FUJIKI Tooru (107)

Uses of Historical Heritage:

Start of the Research Project for the *Naruto* Whirlpools between *Hyogo* and *Tokushima* Prefecture

..... YABUTA Yutaka (115)

Recent State of the Project for "Japan Heritage in *Awaji* Island"

..... ITO Hiroyuki (124)

Field Report:

Tatara-Iron Production and Sword in Japan; report on the roots of my family

..... KAJIMOTO Takekuni (131)

Report of Research Reports from the Historical Institute:

'*Harima no kuni fudoki*'-Records of the Local Customs of *Harima* Province' Research Group;

'Lord Akamatsu and *Yamajiro*' Research Group; '*Tatara*-Iron Making' Research Group (139)

Published by

THE HISTORICAL INSTITUTE of HYOGO PREFECTURE

Hyogo Prefectural Museum of History

Himeji, Japan